令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果
－分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区　　名　大正区

学 校 名　三軒家東小学校

学校長名　山田　智博

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和７年４月17日（木）に、６年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

１　調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２　調査内容

(1) 教科に関する調査

・国語
・算数
・理科

(2) 質問調査

・児童に対する調査
・学校に対する調査

３　調査の対象

・国・公・私立学校の小学校第６学年の原則として全児童
・三軒家東小学校では、第６学年　５７名

学校名　三軒家東小学校

令和７年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

平均正答率については、国語では、０．８ポイント全国平均より下回ったが、大阪府平均より１ポイント上回った。算数では、全国・大阪府平均は同じであったが１ポイント下回った。理科では、全国平均より４．１ポイント、大阪府平均より２ポイント下回った。また、無回答率については、国語では２．８ポイント、算数では０．４ポイント,理科では０．５ポイント全国平均より低かった。学習指導要領の内容で見ると、国語では「我が国の言語文化に関する事項」など、３つが全国平均を上回っていた。理科においては、専科による指導を行ってきたがまだ成果は出ていない。ただ、無回答率はすべて全国平均より低く、粘り強く最後まで問題に取り組んだ様子がうかがえる。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

［国語］「言葉の特徴や使い方」が４．０ポイント、「我が国の言語文化」が３．９ポイント、「読むこと」が０．５ポイント全国平均より上回った。しかし「情報の扱い方」が１．４ポイント、「話すこと・聞くこと」は、５．３ポイント「書くこと」が２．１ポイント下回った。国語に関しては、習熟度別少人数学習において、少人数で下位層の児童に個に応じた指導を行ってきた成果が少し表れている。
［算数］「データの活用」で１．７ポイント、「変化と関係」で１．４ポイント全国平均より上回った。しかし、「測定」で１．６ポイント、「図形」で０．９ポイント、「数と計算」で０．１ポイント下回った。週３回行っている「計算タイム」の成果が表れ、「数と計算」は全国平均まであとわずかに迫っている。
［理科］「生命」は、４．４ポイント全国平均より上回ったが、あとの３つは下回った。専科教員によりきめ細かい指導を行っているが、まだ成果は表れていない。

質問調査より

「自分には、よいところがあると思いますか」「将来の夢や目標を持っていますか」については肯定的に答えている児童は、どちらの項目も大阪市や全国平均より上回っており、自己肯定感が高い傾向にある。「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」についても大阪市や全国平均より上回っており、学校生活において先生と良好な人間関係が築けていることが伺える。また、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」についても、大阪市や全国平均より上回っており、学級活動の話合い活動を通して「話し合う力」に焦点を当て、学び合いのある授業づくりに取り組んできた成果が表れてきている。

今後の取組(アクションプラン)

本校は、４年間の国語科の研究の後、「総合的な学習の時間」の研究に取り組み、文章や参考資料を「読み取る力」や学習したことを発表する場面から「豊かに表現する力」の育成に取り組んできた。さらに昨年度からは、「話し合う力」に焦点を当て、学級活動の話合い活動を通して、「自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりする」力の育成をめざして研究を進めている。これらの積み重ねにより、学び合いのある授業に取り組み子ども達の協働的な学びを推進していく。また、そのために日常使いのICTの活用も進めていき、協働学習支援ツールなどで授業形態の幅を広げながら、教員の授業力向上をめざして授業実践に取り組む。そして、誰一人取り残さない学力の向上に努め、きめ細かい連携のもと、習熟度別少人数学習も継続し下位層の児童の学力保障にも力を入れていく。